
復讐者は嘲笑う

戸次サク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐者は嘲笑う

【Nコード】

N8193S

【作者名】

戸次サク

【あらすじ】

それはある日突然、狂いだした。仲間が仲間じゃなくなっていく…そんな現実を目の当たりにした主人公は戦う事を決意した。自分のために、クラスメートのために。

プロローグ

人が嫌がることをしてはいけない。

人は皆平等である。

それは所詮偽善だと思います。自分達を良く見せるための都合のいい妄想。

現実はそのような奇麗事が通じる世界ではないのに。

どんなに良く見せてもすぐ分かる。どす黒くて汚れた感情が。

その闇は隠せる物ではないのに。

人々は躍起になってそれを隠そうとしている。

表面上では友達ヅラして、裏では悪口を言っている。

“人をいじめてはいけない”なんて嘘じゃないか。

気に入らない奴は村八分。規格外は仲間はずれ。ソレが現実。

単なる奇麗事じゃないか。

“私達、ずっと友達だよ” って言っても、いざとなったら逃げるんだね。

自分達は傷つきたくないから。所詮自分が可愛いものね。

裏切るくらいならば、最初から関わらなければよかったのに――

私はお前達を復讐する力を手に入れた。躊躇などない。容赦はしない。

だって、お前達は虫けらだから。

さあ、始めようか。最高で最悪なゲームを――

プロローグ（後書き）

めちやくちや厨二病展開です…ははは…;
多分鬱展開が多いかも。更新は不定期です。

1話目 悪魔に見初められた日（前書き）

もう、後戻りは出来ない。

1話目 悪魔に見初められた日

(何で、私ばかりが……)

浅間未来^{あさみき}は真っ暗な部屋の中で、考えていた。

自分は何のために生まれ、何のために生きているのか――

未来の顔からは、まるで生気が感じられない。生きることには疲れたという感じだった。

ここ数年、未来は心から笑ったことが無かった。その代わり、数え切れないほど泣いた。

両親が離婚してから、未来の人生は大きく狂った。幸せだったあの時には戻れない。

小学5年生の時、盗難事件が起きたときに、犯人としてでっち上げられたのをきっかけに、

イジメを受けるようになったのだった。

罵声を浴びせられる、物を隠される、水を浴びせられる、ロッカーに閉じ込められるのは当たり前。

時には殴る蹴るなどのリンチを受けた。机に花を挿した花瓶を、置かれたこともあった。

カッターナイフで、肌を切り刻まれた事もあった。

ひどい時には、先生すらもイジメに加わっていたのだった。

中学2年の冬休みには、イジメの主犯に売春を強要されたりもした。そして、友達だと思っていた人にも裏切られた。

高校に入って、イジメは収まるかと思ったが、主犯も同じ高校に入学した事により、

一部の人にいじめられた。未来イジメに加わっていない者は、ただただ傍観しているだけだった。

たった1人を除いて――。

地獄は学校だけではなかった。自宅もまた彼女にとっては地獄だった。

離婚したあたりから、未来そっちのけで母親は男を作って遊び歩いていた。

会話は皆無に等しかった。あつたとしても

“目障り”

“なんで生まれてきたんだ”

“死ねばいいのに”

“消えろ”

“アンタなんて、産まなきゃ良かった”

などと、母親が一方的に罵声を浴びせるだけだった。時には殴る蹴るなどの暴行を加えていた。

そして、交際相手の男も、未来に対して虐待を加えていた。

「私なんて……生まれてこなければ良かった……」

未来は涙を流しながら、ポツリと呟いた。

涙は止め処なく溢れ出た。まるで、決壊したダムのように。

そして、筆箱の中から、カッターナイフを取り出し、手首に当てて、切ろうとしたその時――

『そのまま死んで悔しくねえのか？お前が死んだところで、奴らは悔やまねえぞ？

せいぜい、玩具が減った程度にしか思わんだろう』

地を這うような、男の声が部屋中に響いた。

後ろを振り向くと、バレーボールくらいの大きさの黒い靄が、宙を

浮いていた。

「貴方は……誰？」

『俺は、俗に言う悪魔だ』

黒い靄は、低い声で当然とばかりに答えた。

「悪魔？ 何で私のところへ？」

『お前に力を貸すためだ。復讐の為の力をな。お前も欲しいだろう？ 奴らに一泡吹かせたいだろう？ この力さえあれば、何でも出来るぞ。お前はどのような？ 復讐を遂げぬまま犬死にするか、人の心を捨て、復讐をするか。』

二つに一つだ！ さあ、選べ！！」

未来は、突然のことで悪魔が何を言いたかったのか分からなかった。だけど、復讐をしたいという気持ちは、確かにあった。

「……私は、復讐をする。そして、私を虐げた奴らに後悔させてやるんだ」

『そうかそうか。後悔するなよ？』

黒い靄の悪魔は、下品な高笑いをあげながら、闇の中へ消えていった――

未来は辺りを見回した。だけど、特に変化は無かった。変わったことといえば、暗闇の中でも物がはっきり見えるようになったくらい。

あの悪魔は、嘘をついたのか？

（やっぱり、私に復讐なんて無理なんだ……）

と思った時、右手をふと見ると、握られていたカッターナイフが、原型を留めないほど、粉々に砕けていた。

（これは……悪魔の力なのか？ いや、こんなものではない筈……）

カッターナイフを粉々にした事で、悪魔に力を与えられたと確信したのか、

未来は思いつく限りの事を試した。

物を投げ飛ばす、周りのものを壊す、何も無い所から物を出す、炎を出すなど。

そして、全て成功したのだった。

「ククッ……ククククク………」

未来は笑みを浮かべ、ククッつと喉を鳴らし、笑った。

それは狂氣的で、とても歪んだ笑みだった。

「ヒヒヒヒヒ……さて、まず最初に誰を実験体にしようか……」

あ、いたじゃないか、身近に……永遠にサヨナラだね、お母さん」

未来は制服に着替え、スクールバッグに必要なものを詰め込むと、家を出て行った。

その日から、未来の母親とその交際相手の男は、二度と家から出る事は無かった。

その代わり、近所では血まみれの少女が、目撃されたようだ。

1話目 悪魔に見初められた日（後書き）

うわぁ…短い…O Y Z

2話 全てが崩れた瞬間（前書き）

もう、だれも逃れられない。

2話 全てが崩れた瞬間

1時間目終了後――

(今日も、浅間さん来てない……)

隣にある誰もいない席を見ながら、愛世まなよは未来みきを憂えていた。

未来は、学年でも有名ないじめられっ子だった。

愛世はどちらかといえば大人しいが、正義感が強く、悪を許せない性格だった。

クラス内での、未来に対して行われるイジメは、ルーム長としても、個人的にも許せない行為だった。

出来るならば、皆に呼びかけてイジメをやめさせたい。しかし、イジメの主犯格は学年内で

権力が強く、愛世ではとても太刀打ちできない。下手をすれば、ターゲットになってしまう。

そこで、いじめっ子達が分からないように、密かに未来を助けていた。

花を挿した花瓶が机に置いてあれば、“不吉だ”と言いながら捨てたし、

未来の机の中にゴミが詰め込まれていれば、“汚い”と言って捨てた。

時には、いじめっ子達のいないところで未来の相談にも乗ったりもした。

このようなことに出くわすたびに、愛世は憤慨をしていた。それと同時に、力のない自分に対して苛立っていた。

“自分にもっと力があれば”と――

「マナ、どーしたの？」

後ろを見ると、友人の玲奈^{れな}ときゆりがいた。

「玲奈、さゆり……ううん、何でもないよ」

「嘘でしょ。どうせ、浅間さんのこと考えてたんだよね？」

まあ、確かに心配っちゃ心配かも……ここ数日来てないから」

玲奈がうーんと唸りながら言った。そして、さらに続ける。

「マナは十分頑張ったと思うよ。だから、自分を責めないで」

「うん、わかった……」

愛世が、憂いを帯びた笑みを浮かべつつも、そう答えた。

その時だった、突如窓越しに見える景色を、暗闇が覆った。

それは遅効性の毒のように、伝染病のように、鮮やかな世界を侵した。

暗闇が発生してから数十秒後、完全な暗闇に包まれた。

そこに鮮やかな世界などはない。塗りつぶされた黒の中に血のように赤い満月が、ぽっかり浮かんでいるだけだ。

勿論、クラス内は混乱した。

突然の事に、声すら出ない者がいた。恐怖のあまり泣き叫ぶ者もいた。

“コレは夢だ”と言って自分に言い聞かせている者もいた。

「ねえ、何かおかしくない？」

さゆりが、2人にそう言った。

「うん……昼なのに暗いね……。私なんか怖い」と愛世。

「ホントホント、何の冗談だよって感じ」と玲奈が言った。

ピンポンパンポーン――

今の状況には似つかないであろうBGMが、流れ出した。

しかし、それがかえって不気味さを醸し出していた。

もしかして、校長先生が何かお知らせでも伝えるのか？もしかしたら、ここから抜け出せるかも！

と誰もが期待をしていた。

『皆さん、おはようございます。浅間未来です。突然ですが、これから貴方達1年生を皆殺しにします。

これは殺戮ではありません天罰です。私を虐げた罰です。甘んじて受けてくださいね？

あ、そうそう。逃げようなんて考えないように。貴方達は決して逃げられません。

ですが、助かる方法は1つだけあります。誰でもいいから人を殺す事。

1対1でもよし、集団で殺すもよし。撲殺でも刺殺でも絞殺でも手口は問いません。

とにかく殺してください。人数が多ければ多いほどいいでしょう。そしたら、約束どおり助けます。ただし、私を殺そうなんて考えないように。殺されるのは貴方です。

それでは、せいぜい逃げ回ってくださいね。健闘を祈ります』

この放送で、“もしかしたらこの状況から逃れられる！”という希望は打ち碎かれた。

突然暗くなったかと思ったら、放送で未来に皆殺し宣言をされた。クラスメートの感情は、不安や恐怖から怒りに変わった。

「死ね、根暗のクセに!!」

「やれるもんなら、やってみやがれバーカ！」

「アイツ、頭イカれてんじゃないの？」

「本当に殺す気なのかな？」

怒りの感情は、風船のようにふくらみ、ソレがブーイングへと変わった。

しかし、未来は放送室にいる。いくら彼らが文句を言っても彼女には通じない。

もし仮に彼らの言葉を聞いていたとしても、彼女は嘲笑していたであろう。

“嗚呼、なんて愚かな奴らなんだろう”と。

だけど、愛世と玲奈、さゆりは違った。彼女らは、未来に対して哀れみの感情を抱いていた。

「クラスのヤツらも何言ってるんだよ。お前らが見てみぬふりした結果だろうが」

と玲奈が吐き捨てるように言った。

「確かに、コレはある意味天罰と言えるわね。方法は間違っただけで彼女は主張したのよ」とさゆり。

「そうだね……」

と、愛世が力なく言った。そして、“本当は皆殺しにする気なんでしょう？”と呟いた。
そして、続ける。

「あの放送を信じた人に狙われたら厄介だよね……。出来るだけ長く生き延びて、彼女を説得し……」

と言いかけた時、女子生徒の悲鳴が隣の席から聞こえた。
隣を見ると、女子生徒が血まみれになって倒れていた。

悲鳴をあげた当人は、首を切られ、息をするのがやっとと言うくらい弱っていた。

首を切られた痛みからか、物凄い形相をしていた。

女子生徒の近くに、血の付いたカッターナイフを持った女子生徒が佇んでいた。

それは笑いもせず、ただ無表情で突っ立っていた。勿論、大量の
返り血を浴びていた。

教室中が再びざわついた。

「あの大人しい大谷さんが……」

「ありえない……よくもあんな事ができるよね」

「最低……」

「オイ、大谷！そんな事が出来るな……！」

1人の男子生徒が叫ぶように言った。

ソレに対しての、大谷と呼ばれる少女の応答は、実に冷淡なものだ

った。

「私、あんな奴に殺されたくない。だからやったまでのこと」

大谷は、次の獲物を求めてふらふらと教室の外へ出て行った。

それにつられてか、他の生徒達も逃げるようにして、教室から出て行った。

大谷真理恵は、人を殺める道へ進んだ。自らが生きるために。

彼女は、自分が生きるためなら、他人などどうなろうが知ったこっちゃないと、思っているのだろう。

人は、自分の利己的な願望の為なら何でも出来る。

復讐のために、自らの魂を悪魔に売った未来と、自分が生きるために、クラスメートを殺めた大谷を見て

愛世は、人間の恐ろしさを嫌と言うほど味わった。

しかし、これはまだまだ序の口なのだろうと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8193s/>

復讐者は嘲笑う

2011年10月9日01時08分発行